

## 私と与論島の出会い～ユンヌの海について～

講師 大久保 泰裕

皆さんはじめまして。『ユンヌの海』の作者・大久保泰裕です。

資料等で読まれている方もいらっしゃるかもしれませんが、私と与論島との出会いは、小学校四年まで遡ります。

その日が来るまで幼かった私は与論島の存在を知りませんでした。

今から二十年前、私は東十条小学校の体育館で突然、与論島と出会ったのです。

数日後に与論という島から生徒がやってくるということで、その事前学習として、カーテンが締め切られた薄暗い体育館で、与論の景色が写されているスライドを見ました。最初は、ただボーッとスライドを眺めていたのだと思いますが、カシャ、カシャという音で、スライドが変わっていくたびに、それまで見たことのない赤と緑の大地、原色の草花、海と空との境目が分からなくなるくらい美しい、その青の世界に引き込まれていきました。

その日、私がスライドで見た光り輝くカラフルな色の世界は、二十年経った今でも鮮明に思い出せる程の強い衝撃でした。

天国というものがあるのなら、それはきっとこんな所だろうと、幼いながらに思ったものです。

だからその天国のような楽園の島から来た同世代の子供達が、私にはピーターパンのように思えたのです。

彼らは絵本の世界から飛び出してきたに違いないと。

私の記憶では各学年に二人ずつ来られたと記憶していますが、偶然その中の一人、茶花小の本畑敦史君が私と同じ四年一組のクラスになりました。

席が隣同士というわけではなく、性格も趣味も違った二人でしたが、昼休みにケイドロをしたりして遊んでいる内に、私達はいつの間にか一番の仲良しになっていました。

わずか数日の交流学習で芽生えた友情でしたが、彼との別れが辛く、寂しく、私達は最終日に、与論から贈られた友好の蘇鉄の木の前でケースから名札を抜き、そこに互いの連絡先を書いて別れました。

小学校在学中はその名札がなによりの宝物でした。

東十条の子供にとって与論からのお客様は、今も昔も変わらずにスターなのです。



しかし中学生になり、新しい生活の刺激が、楽しかった小学校での思い出を過去のものへと変えて、宝物だった名札も、机の引き出しの奥へ奥へと沈んでいきました。ところが中学二年の夏休みを目前に控えたある日、それまで元気だった父が「なかなか風邪が治らないから」と病院へ検査に行くことになり、その数日後、思いもかけない結果が出ました。

『多発性骨髄腫』それが父の病名でした。

「余命三ヶ月。長くても半年」と告げられ、「悪くなることはあっても良くなることはない」と宣告されました。

父は事前に一人で宣告を聞いていて、母と私が揃ったところで、もう一度、自分の命の残り時間を、幼過ぎた弟以外の家族に聞かせたのでした。

当時は明確な治療法は存在せず、病院に入院して、ただモルモットのようにデータを録られ、死を待つくらいなら、痛くても、苦しくても、家族四人で共に暮らす道を父は選びました。

そしてまだ幼かった私と弟に、少しでも多くの、自分との思い出を残そうとしたのです。

ちょうど夏休みに入り、父が「どこか行きたい所はないか？」と聞きました。

でも私達にはそれどころではありません。

暗い雰囲気のある食卓。

弟の手前、少しでも明るくしなければと思えば思う程、辛くなっていく心。

そんな家族の気持ちを察してか、父が「家族旅行は南の島にするか」と言いました。

「南の島・・・」その言葉は、机の奥に埋もれかけていた、かつての宝物を色鮮やかに甦らせてくれました。

お別れの日には交換した本畑君の名札です。

名札を探し出し、父にその時の話をしました。

すると父は、「そんなことがあったのか、ならもしその子がお前のことを覚えていたら、そこに行こう」そう言って与論の本畑さんに電話をかけてくれたのです。

そして声は変わっていましたが本畑君は私を覚えていてくれました。

それからは本当にアツと言う間でした。

父は与論行きを決め、私達家族は羽田から沖縄、そして与論へと向かったのです。

「これが父との最後の旅行になるかもしれない」と思いながらも、初めて乗るプロペラ機は、やはり楽しくて、眼下に見えるエメラルドグリーンの海が近付いてくると、ワクワクが体の中から飛び出してしまいそうなくらい気持ちが明るくなりました。

赤土の大地に飛行機が降りて、タラップが降ろされると、塩分を多く含んだ潮風が機内に流れ込みます。

そして飛行機を一步出ると色が見えるくらい強烈な陽射しが私達を迎えてくれました。滑走路を建物の方に歩いていくと送迎デッキの手摺りに掛けられていた横断幕の字に気が付きました。

「歓迎大久保ファミリー様」そう書かれた横断幕に驚いて、「これは何事か」と、その下を通過して建物に入ると、そこには同じ横断幕を持った竹下徹教育長をはじめ、多くの島民の方々が私達を出迎えてくれていたのです。



ほとんど思い付きで与論に行くことになり、その旅行の最中「一度くらい本畑君に会えたらな〜」くらいに思っていた私達にとって、それは本当に思い掛けない歓迎でした。空港内で、出迎えて下さった方々と挨拶を交わし、宿泊先のコーラルホテルへ。夕方には、ホテルの庭に、交流学习で東十条に来ていた子達やその家族、関係者が多数集まって歓迎会を開いてくれました。

自己紹介から始まった歓迎の会は、本畑君との再会、歓迎のエイサー踊り、バーベキューと流れていき、最後は参加者全員による童謡『ふるさと』の大合唱で終了となりました。

老いも若きも、生まれた場所さえ違う者同士が腕を組み、一つの歌を歌い、楽しげに笑いあう。

あの夕暮れの光景以上に叙情的で美しい景色を私は、今だに見たことがありません。

その翌日には、本畑のお母さんが迎えに来てくれて、車で島内を案内して下さいました。与論城跡の珊瑚で出来た石垣と、そこから見た赤と緑と黄色の、まるでタペストリーのような大地の色。

遠浅の海をグラスボートで渡った先にある、星の砂で出来た百合ヶ浜の白い輝き。それらは小学校の時にスライドで見て憧れた、おとぎの国、そのままの美しさで、そこにありました。

驚いたことに本畑のお母さんは乗ってきた車を、そのまま私達に貸して下さいました。そのお陰で私達は自由に島内を見て回ることができ、父は寺崎海岸という誰も居ない、家族だけで過ごすことの出来る海を見付けることが出来たのです。

光と波と珊瑚とが紡いだ幾重もの、幾重ものカーテンを父と弟の三人で沖に向かって泳いでいき、母がその様子を岩陰から見守る。父はその光景を愛したのだと思います。

それからは毎日、島を離れるその日が来るまで、寺崎の海に通いました。



美しい海と空と、温かな人達に囲まれて過ごす穏やかな時間は、私達だけでなく、死を見据えていた父からも病気のことを忘れさせてくれました。

そして遂に、おとぎの国から現実の世界へと帰る日がやってきました。

空港には来た時以上の人が集まっていて、ロビーには手造りの演台まで設けられていました。

その台に上がり、父と私が感謝の言葉を伝えると、空港の外まで聞こえるくらいの大きな拍手を島の人達は贈ってくれました。

して頂いたことがあまりに多く、私達が返せたものはあまりに少なかったというのに、それでも島の人達は私達に沢山の拍手と生涯消えることのない素敵な思い出を下さったのです。

挨拶を終え、搭乗手続きを待っていた時のことです。

売店でお土産を見ていると本畑のお母さんが私達兄弟の所に来て、突然ギュッと抱きしめてくれました。

そして「お婆さんはヨロンのお母さんだから、いつでも帰っておいで」と言ってくれたのです。

その言葉が無性に嬉しくて、胸がいっぱいになりました。

時間が来てしまい、拍手に送られて飛行機に乗り、その小さな窓から空港を見ていると、先程まで晴れていたのに雨が降ってきました。

プロペラが大きな唸りをあげ、飛行機が動き出した、その時、送迎デッキで雨の中、手を振っている人の姿が見えました。本畑のお母さんです。雨足が強くなっているというのに、傘も差さずに、こちらに手を降り続けてくれています。



「お母さん、もういいよ。もう十分だから、早く建物に入って、早く入って」そう言っても、お婆さんは飛行機が見えなくなるまで、手を降り続けてくれています。

小さくなっていく島を見ているのが、とても辛くて、涙を拭いていると父が私の肩を叩いて「外を見てみろ」と言いました。

窓が濡れているのは雨のせい、それとも拭いきれなかった涙がそうさせるのか分かりませんでした。とにかく言われた通りに窓の外を見ると、与論島の上に大きな虹が架かっているのが見えました。

その様子は、まるで与論島までが、私達を見送ってくれているようでした。

私は今も思います。 与論島は奇跡で出来ているのだと。

東京に戻った父が病院へ検査を受けに行くと「良くなることはない」と言われていた

数値が、わずかに良くなっていました。

驚いた医師が「なにかありましたか？」と聞くと、父は冗談を交えながら「塩水をガボガボ飲んだからな」と答え、それを聞いた医師から「塩水が一番危険なんです！」と注意されたそうです。

ですが父の数値は、それからも良くなり続け、「誤診だったのでは？」と思うまでの回復を見せてくれました。

その後、数値が悪化して入院したこともありましたが、父はその最期まで与論を愛し、私達を毎年与論に連れて行ってくれたのです。

あの年、もし与論に行っていなければ父は宣告通りに、病院のベッドの上で亡くなっていたと思います。

父がその最期まで父らしく生き、父らしい死を迎えられたのは、あの島の風土とそこに住む人々との出会いがあったからです。

父は死の前夜まで、家族と普通に話をして、翌日からの試験に備え勉強中だった私の所に来て「がんばれよ」と言うと、そのまま眠りに就き、翌日母が洗濯物を干している、そのすぐ脇で眠りながら息を引き取りました。享年四十八。余命三ヶ月と宣告された日から、三年も家族と共に生きてくれました。

棺には与論で撮った写真を納め、遺骨の一部は、父の愛した寺崎の海に還しました。父が亡くなって十五年が経ちましたが、今でも父を近くに感じる事が出来るのは、あの共に過ごした三年もの月日の思い出があるからです。

私は今年、その父との思い出を綴った『ユンヌの海』という小説で、紀行文の最高峰とよばれるJTB交流文化賞、一般体験部門の最優秀賞を頂きました。同賞初の審査員全員一致での受賞だったそうです。

そして六月には母校である東十条小学校に、与論三小学校（茶花小・那間小・与論小）から十一人の生徒さん達が来られました。

私も『ユンヌの海』の作者として歓迎集会に参加させて頂いたのですが、二十年前、子供だった私が与論と出会い、本畑君と友達になった同じ場所で、私と本畑君の後輩達が向かい合って座っている、その光景に強い感動を受けました。

絆とは本来、感じるもので、目に見えるものではないですが、これまで与論と東十条とが守り、育ててきた絆という太い幹に、新しく無数の糸が結ばれていくのを見た気がします。

これからも毎年、その糸は増え続け、絆も太くなり続けると確信致しております。

また当初の予定には、なかったことですが、町岡先生をはじめ、与論と東十条の先生

方の御尽力により七月一日には十一人の生徒さんともふれあうことが出来ました。  
その最後、東十条小学校の校庭で記念写真を撮ることになったのですが、その場所がなんと、二十年前、本畑君と名札を交換した、あの蘇鉄の木の前だったのです。  
与論との絆が続いているように、私達の気持ちや想いも続いているのです。

『ユンヌの海』は私一人で書いたものではありません。  
父や家族、本畑さんや竹下徹先生、町岡先生や与論と東十条の先生方、生徒さん、そして島民の方々との出会いがあったからこそ書けた小説です。  
つまりは皆さん、一人一人が『ユンヌの海』の作者なのです。  
そして『ユンヌの海』の最高の読者も与論の皆さんです。

本日は、最後まで聞いて頂きありがとうございました。

今日、皆様の前でお話出来たことも、私は一生忘れないでしょう。  
最後にもう一度だけ、ミッシーク・トートウガナシ。  
ありがとうございました。

平成二十八年十一月二十日

『ユンヌの海』作者 大久保 泰裕

与論の皆様へ

#### 大久保泰裕氏 略歴

昭和59年11月16日 地元の旧家である大久保家18代当主邦彦の長男として生まれる。  
平成4年4月 北区立東十条小学校入学  
平成7年(4年生) 与論3小学校との交流学習で与論島を知り、M君を知る。  
平成9年4月 北区立王子中学校入学 (平成12年4月、私立小松原高校入学)  
平成10年(中学2年)7月、父余命3ヶ月と宣告される。8月、家族で与論島訪問。  
以後、父が亡くなるまで毎年夏、与論島に旅行する。  
平成14年3月4日 父、邦彦死去(享年48歳)  
平成19年4月 書道教室教師となる傍ら、大久保家の古筆の展示会、講演会を行う  
平成28年1月 「ユンヌの海」にて第11回JTB交流文化賞一般体験部門最優秀賞  
に選ばれ、作家としてデビューする。

去る平成28年11月20日の東京与論会「会員のつどい」における大久保氏のご講話を、ご本人の了解を得て、東京与論会のHPへの掲載させていただきました。